

Title	アダム・スミスの貨幣価値観
Author(s)	岡橋, 保
Citation	経済論叢 (1934), 39(6): 849-867
Issue Date	1934-12-01
URL	http://dx.doi.org/10.14989/130525
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 六 第

卷九十三第

行發日一月二十年九和昭

論 叢

地方税としての酒税……………法學博士 神戸正雄
社會的勢力の分析……………文學博士 高田保馬

時 論

増税とインフレーション……………經濟學博士 小島昌太郎
臨時利得税を論ず……………經濟學博士 沙見三郎

研 究

經營信任會の構成に就いて……………經濟學士 大塚一朗
アダム・スミスの貨幣價值觀……………經濟學士 岡橋 保
爲替相場
の暴落が國民の富に及ぼす影響について……………經濟學士 江口巳與吉

說 苑

貨幣量と銀行制度……………經濟學士 中谷 實

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題
本誌第三十九卷總目錄

アダム・スミスの貨幣價值觀

岡 橋 保

—

アダム・スミスに従へば、貨幣とは交換の用具であると共に、價值の尺度である。而して貨幣の此等二つの規定は、富と貨幣又は金銀とを混同し同一視する思想を産むに至つたと¹⁾。斯くスミスは、重商主義的思想の誤謬を其根抵にまで遡つて批判し吟味して居る。而して此反重商主義的な立場の裡に彼の貨幣本質觀が露呈されて居る。此貨幣本質觀に従へば、貨幣は價值の尺度であり商業の用具であるが故に、夫は又一つの有價值の財でなければならず、從て金銀なのである。彼の斯る貨幣觀は其貨幣生成觀に依て基礎付けられて居るのであるが²⁾、それ自體は又同時に、彼の貨幣價值觀を必然規定せざるを得なかつた³⁾。即ち彼に在ては、貨幣の價值は金銀の價值であり、金銀の價值は一般商品の價值法則に依て決定さるべく、貨幣の價值法則は商品の價值法則と其本質を同じうし、寧ろそれは商品價值法則の貨幣への一適用として理解さるべきものである。從て彼の貨幣價值論の解明は其商品價值論の理解を前提とするが故に、先づ彼の商品價值論の基本的大綱を述べん。

- 1) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, ed. by E. Cannan, 3. ed., 1922, vol. I, p. 396.
- 2) Smith, *ibid.*, vol. I, bk. I, ch. 4. 拙稿, 「アダム・スミスの貨幣本質觀」(「内外研究」, VII / 4) 14頁以下參照。
- 3) 拙稿, 前掲論文, 31-2頁參照。

スミスの商品價值論は、價值尺度の問題と價格構成部分の問題及び市場價格の自然價格よりの背離の問題の三つから成つて居る。⁴⁾ 彼は先づ、價值問題の生じ得べき社會關係をば分業社會に於ける過剰生産物の私的交換の裡に求め、その論究を財の『他物購買力』即ち交換價值に限定して居る。⁵⁾ 而してそれが交換價值なる相關的な價值の故に、彼の價值論は價值測定の問題として展開されざるを得なかつた。斯くて「國富論」第一編第五章は、價值の尺度換言すれば交換價值の大きさの規制者としての『勞働』を論じ、そこに彼の勞働價值説を展開して居る。

スミスは商品の交換價值の『眞實の尺度』即ち其『眞實價格』をば『勞働』なりとし、時にはそれを購買又は支配勞働とも生産に要せし個人的な勞役と苦心なりとも説いて居る。更に彼は、商品に含まれて居る『勞働の價值』從て生産のため個人の犠牲とすべき安樂、自由、幸福の量なりとし、勞働こそ總ての商品の價值を測定すべき唯一終局の眞實の標準なりと論じて居る。⁶⁾ 斯く茲には色々な概念規定が雜然と相錯綜して居る。併し商品の交換價值の尺度としての勞働を斯く主觀的に捉へんとする事は幾多の難點を伴ひ、遂に勞働に依る交換價值の測定は不可能となる。⁷⁾ そこで彼は『勞働の價值』なる概念に訴へて、交換價值の尺度としての勞働の不變性を強調せんとし、⁸⁾ 價值測定の用具としては専ら、貨幣へと逃避するに至つた。⁹⁾

併しスミスも、交換價值の尺度としての勞働をある客觀的な大きさとして理解して居た様ではある。彼は原始社會に於ける財交換を規律すべき唯一の標準を社會的平均勞働量に求めて居る。¹⁰⁾

4) Smith, *ibid.*, p. 30, 32 et seq.

5) Smith, *ibid.*, p. 24, 30.

6) Smith, *ibid.*, p. 32, 35.

7) Smith, *ibid.*, p. 33.

8) Smith, *ibid.*, p. 32, 35.

9) Smith, *ibid.*, p. 33-4. 拙稿, 前掲論文, 19-20頁參照。

然るに此客觀的に規定されし社會的平均勞働が、個人主義者スミスにとつては、或は支配勞働として、或は個人的な勞苦として、又或は個人的な安樂、自由、幸福の犠牲として主觀的に捉らへられたのである。斯くて彼は、原始社會に在ては勞働の全生産物は其生産者に歸し、そして或商品の生産に普通必要な勞働量は、通例該商品の購買し支配し得べき勞働量を規制し得る唯一の事情であつたと論じて居るのであつて、¹¹⁾此主觀的な把握の背後には常に社會的平均勞働が伏在して居るが如くである。人は、このスミスの相錯綜せる見地の裡に、經濟事象の實際的觀察に依て迷はされて居る彼を看取すべきである。¹²⁾

併し此勞働價值法則も資本蓄積と土地私有の存する文明社會には妥當しない。茲では勞働の全生産物が其生産者に屬するのではなく、資本家と地主に夫々利潤と地代の形で分割されねばならない。¹³⁾從て總ての商品の價格は、結局、勞賃と利潤と地代の孰れか一又は全部に分割さるべく、茲に彼の勞働價值説は生産費價值説へと轉じ、商品價值法則の究明は自然價格の構成部分の論述となつて現はれたのである。

然らばスミスの此轉向は何に基くか？ それは、既述の如く、勞働量と勞働の價值とを孰れも商品價值の決定者とする彼の勞働價值説の裡に胚胎して居ると言ひ得る。彼は或る財に於ける體現勞働と之で以て購ひ得べき現實勞働との間の不平等な交換の事實に當面して、之を勞働價值法則自體の無効と考へ、遂に商品價格構成部分の究明へと移行したのである。乍併彼は、此場合、利

10) Smith, *ibid.*, p. 49.

11) Smith, *ibid.*, p. 49-50.

12) アルフレッド・アモン、「正統派經濟學」(「社會經濟體系」, 第六卷)425-6頁參照

13) Smith, *ibid.*, p. 51-2. et passim.

潤や地代の源泉を商品に體現されし勞働量の一部として捉へ、折角正しき認識に到達して居りながら、勞働の生産物の價值と勞働の價值との概念上の混同は彼を遂に邪路へと導いた。そして商品價值の三部分への分解の問題が、纏て商品價值の三部分よりの構成の問題とすりかへられ、商品價值の分解部分としての勞働、利潤、地代の三つが却つて商品の『交換價值の三源泉である』とされた。¹⁵⁾ スミスが斯く資本と勞働との不平等な交換を以て勞働價值法則の矛盾なりとせるは正しい。そして之を以て直ちに勞働價值法則それ自體までが妥當性を喪ふに至つたと考へた。彼は此現實の矛盾を勞働價值法則からの一つの偏倚として理解し、斯かる原則から之を如何に誘導すべきかを究明せずに、却て此現實を以て原則となし、之を説明すべき法則として勞働價值説とは別に生産費價值説(自然價格論)を樹立するに至つた。吾々は茲に、理論の人よりも寧ろ實際家たるスミスを觀うる。¹⁶⁾

勞働價值説より生産費價值説への轉向は、商品の『眞實價格』に代へて『自然價格』を以てした。彼に従へば、或る商品の生産に要する自然率の勞賃、利潤、地代の合計が其商品の自然價格であつて、¹⁷⁾ 之は謂はば總ての商品價格が絶えずそれに惹き寄せられる中心的價格である。¹⁸⁾ そこで彼は、價值問題の第三として、此自然價格を中心としてその時々決定さるべき市場價格の問題を論じ、茲に需要供給説を展開して居る。

彼に従へば、市場價格とは商品の通常販賣價格であり、それは時に自然價格より高下し、又全

14) Smith, *ibid.*, p. 67.

15) Smith, *ibid.*, p. 54.

16) レウ・キンスキー, 「經濟學の建設者」(山下英夫邦譯), 149頁參照。

17) Smith, *ibid.*, p. 57.

18) Smith, *ibid.*, p. 60.

く之と一致する。然らば此市場價格は如何に決定されるか？それは商品の供給量と『有効需要』¹⁹⁾とに依て決定されるのであつて、商品の供給量が有効需要に不足すれば買手に競争生じ、其市場價格は自然價格以上となり、又其供給量が有効需要に超過すると逆に賣手側に競争起り、其市場價格は自然價格以下とならう。而して供給量が有効需要に合致する時は、茲に市場價格は自然價格と合致するであらう。¹⁰⁾

これスミスの需要供給説の全貌にして、それは自然價格を中心として施回すべき市場價格を説き、此變動を明かにするのが其本質であるが如くである。故に需給説は理論的前提に自然價格論を持たねばならず、自然價格を前提に要請して初めて、市場價格の自然價格よりの乖離を説明すべき理論として基礎附けられるのである。茲に於て生産費説と需給説との二位一體論が存する所以である。²⁰⁾然るに供給量の過不足は自然價格に何等かの影響を與ふべく、²¹⁾このことは論者をして遂に、商品の交換價值は生産費と需給關係に依て決し、而も需給關係の支配的地位を主張するに至らしめた。²²⁾

併し需要供給説夫自體は何等獨自性を持たない。それは自然價格論を前提して初めて其理論的根據を得る、從て生産費價值説と需給説との相關性を説く傍ら、構想上後者を上位に置きその指導權を強調する山口助教教授の見解は當らない。需給説と生産費説との關係は斯く上下的のものではなく、唯前者が其理論的前提として生産費説を持たねばならぬと言ふ意味に於て、即ち其理

19) Smith, *ibid.*, p. 58-60.

20) 山口茂助教教授、「正統派經濟學と金屬主義貨幣觀」(『經濟學研究』, 第二卷)193頁參照。

21) Smith, *ibid.*, p. 65 et seq.

22) 山口茂助教教授、前掲論文、174、177頁及諸所參照。

論的基礎附けを生産費説に求め、從て生産費説はそれの基礎であり根柢をなすものであつて、需給説はその上に打ち建てられし上部構造なりとの意味に於てのみ、需要供給説の上位論が是認められる。²³⁾

斯くてリカアドが需要供給説を以て市場價格の變動を説明するものとしてのみ理解したことは正當なる洞見と言はねばならぬ。此點リカアドのスミスよりの一步前進であつて、兩者の差異は既に夫々の價值論の裡に看取される。山口助教授の指摘されるが如く、スミスは個々の商品の交換價值の問題には價格構成論を以て、價值測定問題には主として勞働價值説を以て答へて居るが、リカアドは此等兩問題をば一貫して勞働價值説を以て論じて居る。²⁴⁾そしてこれこそ需要供給説の適用範圍が、兩人に在ては夫々異なる所以である、即ちスミスの生産費説への轉向は、同説の循環論的性格の故に、生産費の決定、從て自然價格論にまで需給法則の適用範圍を擴大せざるを得なかつた。然るにリカアドに在ては、勞働價值説を以て貫徹されて居り、其價值論の完足性の故に、市場價格の價值よりの背離を説明すべき法則としてのみ需要供給説を認めて居るに過ぎない。

スミスの自然價格論が其理論的性格に於て循環性を含むが故に、彼は自然價格の説明に再び需給説に頼らざるを得なかつた。從て彼の自然價格論は生産費説と呼ぶよりも需給説と稱すべきである。²⁵⁾斯く彼の轉向は遂に其價值論全體をば需給説の一色で塗りつぶすの結果となり、其理論體

23) 山口助教授、前掲論文、173頁參照。

24) 山口助教授、前掲論文、177頁參照。

25) アモン、前掲論文、(第七卷)、349頁參照。

系上、需給説が支配的と考へられ、此意味に於て同説の上位を云々することは、あるひは許されやう。然れ共山口助教授は、生産費説を以てなほスミスの理論的構想上の一素成となし、同説に對する需給説の上位を主張して居られる様である。²⁶⁾之は全く、商品の供給量の過不足が自然價格に與ふべき影響を強調せる謬見に過ぎない。²⁷⁾

スミスの商品價值論に於ける需要供給説の地位は以上で大體明らかであらう。この理解は、彼の貨幣價值論の究明に重大な意味を有し、殊に數量説に對する彼の立場を解明すべき唯一の秘鑰を提供するであらう。

スミスは『勞働』を以て最初の購買手段であり、唯一眞實の價值の尺度であるとする。²⁸⁾即ち價值の尺度であり、購買手段である『勞働』こそ眞の貨幣と言ふべく、斯かるものとして『勞働』は一般的等價物である。而して此『勞働』を體現するものとして金又は銀が貨幣である。故に貨幣即ち金銀は、其體現せる勞働量の多少に依て價值の變動あるを免れない。金銀は爾餘の商品と等しく其價值變動す。金銀の價值は當時周知の鑛山の產出量の如何に依存す、詳言せば銀の一定量を鑛山より市場に運ぶに要する勞働量に依て支配される。²⁹⁾從て十六世紀に於けるアメリカ新鑛山の發見に伴ふ歐洲の銀價の暴落は、其生産に要する勞働の減少せし故に外ならず。³⁰⁾斯くてシュミットの言葉の如く、スミスに在ては貨幣價值の不變性の思想は看取さるべくもない。³¹⁾

26) 山口助教授、前掲論文、177頁參照。

27) 山口助教授、前掲論文、174頁參照。

28) Smith, *ibid.*, p. 32-3. 29) Smith, *ibid.*, p. 34, 38, et passim.

30) Smith, *ibid.*, p. 34.

31) Smith, *ibid.*, p. 35; Gerhard Schmidt, *Der konstante Geldwert von Aresmius bis Knapp*, 1925, p. 46.

以上は原始社會に於ける貨幣價值決定の事情である。然るに資本蓄積と土地私有の行はれるに及び、商品價值は其生産費に依て規律されるに至つた。此事は金銀從て貨幣の價值の決定事情をも變化せしめる。既述の如く、商品の價格は結局、勞賃、利潤、地代の孰れか一又は全部に分解される。³²⁾そして此等三分解部分をば交換價值の三源泉なりとし、³³⁾價值の分解部分と構成部分とを混同して、分解部分の問題を構成部分の問題として取上げるに至れるスミスは、自然價格の變動を此構成部分たる自然率の勞賃、利潤、地代の夫々の變動に依るとなし、此等三者の自然率の變動事情を詳論して居る。³⁴⁾併し地代は價格の構成部分としては、勞賃や利潤と其趣を異にし、地代の大小は價格の大小の結果であつて、勞賃や利潤の如く、其高低が價格の高低の原因ではない。³⁵⁾但し限界土地の生産物を除けば、地代は其價格の一部として含まれて居るのを見る。斯くて貴金屬の價格は當時最良の鑛山に於ける其價格に影響されること著しきが故に、其價格は採掘費を償つて餘り少なく地代の生ずる場合稀である。從て貴金屬價格の大部分は勞賃と利潤より成り、其最低價格は總ての商品のそれと同様、其金屬の生産に通常要する衣食住の經費即ち資本^{ストック}と其通常利潤を併せ償はねばならない。³⁶⁾

併し金銀の時々の價格は此最低價格即ち自然價格より離れ得る。斯かる市場價格の變動も爾餘の商品のそれと同様に、需給關係に依て決定されるが如くである。³⁷⁾而もスミスは金銀の最高價格を決定するものは夫等の實際の稀少か豊富に外ならずと説き、一見其價格の決定を専ら需給關係

32) Smith, *ibid.*, p. 52, 54.

34) Smith, *ibid.*, p. 65 et seq.

35) Smith, *ibid.*, p. 147.

36) Smith, *ibid.*, p. 169, 172, 201, et passim.

37) Smith, *ibid.*, p. 47, 201-2.

33) Smith, *ibid.*, p. 54.

にのみ求めて居る様である。³⁸⁾殊に彼は金銀需要の原因を其効用と美と稀少性に在りとし、此三性質こそ金銀の高價の根柢なりと説く。³⁹⁾然れ共、彼の此所説を以て金銀即ち貨幣の價値を決定するものは市場の需給關係であり、從て貨幣の價値に關する限り、數量説を主張せるものとなすは妥當でなからう。^(註)蓋し金銀價格を昂騰せしむべき需要の原因たる稀少性も、彼に従へば、其獲得に多くの勞働を要すとの事實を意味するに外ならないからである。⁴⁰⁾從て彼の所説の根柢には常に貫して生産費價値説の置かれてあることを看過してはならない。⁴¹⁾斯くて需給説は既述の如く、彼の價値論の體系上では市場價格の自然價格よりの偏倚を説明すべきものに過ぎない。夫は飽くまでも生産費説を其理論的前提に要請すべきものである。此事は重要であつて、彼の貨幣價値觀と數量説との關係を究明する上に、決定的な意味を持つものである。

註、山口助教授、前掲論文、一七六—一七七頁參照。

山口助教授は、正統派經濟學に在ては、商品價値原理と貨幣價値原理とは一體として考へられて居り、貨幣に於ても一般商品に於けると同様、其價値の決定上、生産費よりも需給關係が上位に立ち、支配的であると説く。即ち地金の價値又は生産費が貨幣の價値を決定するのではなく、貨幣の價値が同時に地金の價値を支配し生産費を決定すると解すべきである(一七七頁)。これは需要供給説上位論にとつては當然の歸結である。

今スミスの所論に限つて言へば、斯かる主張は彼の貨幣觀の金屬主義的解釋を故意に拒否せんとするムテイーフに依て導かれて居るが如くである(一七七頁參照)。勿論スミスの貨幣論は必ずしも金屬説とは言ひ得ない。併し貨幣價値に關する限り彼は依然メタリストの陣營に屬す。然るに彼の所説の金屬主義的解釋に反對せんとするに急なる山口助教授は、貨幣價値論に在ても需給説の上位を高調して、スミスを數量説(彼自身は之を俗見として拒否して居る)の主張者に加へた。之はスミスの價値論の體系上に於ける需要供給説の地位を誤認せるに依るものであつて、この點にこそ山口助教授の根本的誤謬が存

38) Smith, *ibid.*, 172.

39) Smith, *ibid.*, p. 172-3.

40) Smith, *ibid.*, p. 173, 214.

41) 高垣博士もスミスの需要供給説を誤解して、貨幣の價値に關し不當な非難を與へて居る。(「アダム・スミスの見たる貨幣理論」、商學研究、第三卷、第一號、168-9頁參照。) グライダヌスも亦、スミスの貨幣價値論に於ける生産費説

するのである。

如斯くスミスに在ては、貨幣の價值は商品の價值と同様、生産費說に依て規定さるべく、從て貨幣の價值と其數量との關係も自ら特異のものたらざるを得ない。いま山崎博士に従へば、スミスは貨幣の數量と其價值との間に嚴密な反比例的關係を認むる所謂『數量說』論者ではないが、貨幣の數量の増減に伴ひ其の價值の變動する傾向のあることを認めては居たと。⁴²⁾即ちスミスに依れば、米大陸の豊富な鑛山の發見が銀價下落の唯一の原因であつて、當時歐洲の銀需要は増大しつゝあつたとはいへ、ために銀價が暴落したるが如く見ゆと。⁴³⁾彼の此所說よりして山崎博士は、スミスをロック、ヒューム、ミル、ウォーカー等と同様に數量說論者となすフヒシャーの主張を極端となし、貨幣の數量と其價值との關係をスミスは認めずとなすラフリンを正鵠ならずと斷じて、スミスを以て嚴密な數量說論者とは言ひ得ざるも、なほ貨幣の數量と其價值との間には若干の關係を認めて居たと説く。⁴⁴⁾

いま茲には數量說に就て論じない。山崎博士は貨幣の數量の増減と其價值の騰落との間に何等かの關係を認むるのみにては、所謂數量說に非ずとされる。併し夫が貨幣數量と其價值との間に嚴密な反比例的關係を認むるものではなくとも、數量が能動的に其價值に影響する事を主張する點では、所謂數量說と其軌を一にして居る。從て山崎博士の言へる貨幣數量と其價值との間に若干の關係ありとする主張も、數量の價值への積極的影響を肯定する限りは、數量說の一種とし

の重要性を理解し居らざるが如くである。(cf. T. Greidanus, The Value of Money, 1932, p. 33 et seq.)

42) 山崎覺次郎博士、「若干の貨幣問題」, 126頁參照。

43) Smith, *ibid.*, p. 191-2.

44) 山崎博士, 前掲書, 143頁, 註41參照。

て以下議論を進める。

然らばスミスは、山崎博士の言はれるが如く、貨幣數量の増減が其價值の變動原因なりと主張して居るのであるか？ スミスは米大陸の新鑛山の發見に依る物價騰貴を説明して、銀を市場に齎らす爲の勞働量減じたるを以て、其購買し得べき勞働量は減ぜざるを得ずと爲した。従て歐洲の銀需要が増大せしに拘らず、銀の供給過剰は遂に銀價を低落せしめた様であるとして、一見銀に對する穀物の價格騰貴を銀數量の増大に基くものとなして居る様である。併し銀は其數量の増加に依て價值下落するものではなく、豊かな鑛脈は銀の生産費を低減せしめ、斯くて穀價に比し銀價の著しき低落が生じたと解するのが其眞意であらう。盖し銀價値變遷の第二期を述ぶるに當り、スミスは前掲文章に先だち、一五七〇年より一六四〇年の約七十年間は銀と穀物は其價值に於て反對に變動した。即ち銀の眞實價值は下落した、換言すれば、從來より一層少量の勞働と交換されるに至つたが、穀物の名目價格は騰貴したと述べて居るからである。⁴⁵⁾ さればこそ彼は其際、銀の供給過剰は需要に超過せし爲、其價值暴落せし如くに見ゆと言ひ、決して暴落したと斷定的表現を用ひては居ない。これ生産費説に立つスミスとしては盖し當然であつて、用語上の慎重の裡に其眞意を汲みとるべきである。

更に彼は穀價下落の史實を説ける一節で、銀價の穀價に對する騰貴の原因を、一部は産業の發達に依る銀需要の増大に、一部は鑛山の產出力減退し採掘費の増加に基く銀供給量の減少に求め

45) Smith, *ibid.*, p. 191, 198.

て居る。然るに他の論者は當時却て銀價の下落しつゝありしを説くも、スミスは此主張を以て一部は富の増大は銀數量の増加を伴ふべく、銀數量の増加は其價值を減すとの俗見に基くものとなし穀價の下落は銀價自體の騰貴に依ると論じて居る。⁴⁶⁾斯くて山崎博士がスミスの所論の裡に看取せる『貨幣の數量と其價值との關係』こそは、正に彼が俗見として極力排撃せる所のものなる事が明らかである。又スミスは往時の銀の高價を家畜の低廉に基くとの論者の推斷に對し、家畜の廉價は銀價の高き結果ではなくて夫自體の價值低きが故であると論じて居る。即ち家畜は其獲得に要する勞働僅少なるが故に、之で購ひ得る勞働も亦少ない。從て其價格の低廉は銀の眞實價值の高きを意味せずに、家畜の眞實價值の低廉なる證據に外ならない。銀價の不變なる場合にも尙家畜の價格は低廉であり得る。此事は一商品の價值の變動が單に他商品の數量の増減に依るものではなく、夫自體の生産に要する勞働量の多少に基くべき事を意味す。これスミスが、銀及び其他一切の商品の價值の眞實の尺度は勞働にして、如何なる商品にも非らざる事を牢記すべしと主張せる所以である。茲に彼の反數量説的な根本思想が見られる。⁴⁷⁾從て山崎博士の主張こそ却てラフリンに依て正鵠ならずとの非難を受けねばならないであらう。⁴⁸⁾

勿論スミスも『貨幣の數量と其價值との間に若干の關係』ある事を認めて居た。併し夫は貨幣の價值が其數量に依て規定されるが如きものではなく、寧ろ貨幣の價值に依る其數量の被規定的な關係に外ならない。即ち貨幣數量の増減が其價值の上に何等の影響をも與へず、流通界の必要と

46) Smith, *ibid.*, p. 181-2, 185-6.

47) Smith, *ibid.*, p. 186-7, 237.

48) J. L. Laughlin, *The Principles of Money*, 1921, p. 237-240

する貨幣量の被規定性、其増減の全き受動性を強調して居る。⁴⁹⁾ 彼に従へば、元來貨幣の唯一の用途は消費財の流通に在る。貨幣の媒介に依り一切の商品は賣買され、夫々適當の消費者に分配される。故に一國の流通界に要する貨幣量は、其國に於て年々取引さるべき商品價值に依て決定される。⁵⁰⁾ 商品の價格は其價值を一定量の貨幣で表示せるものなれば、必要貨幣量は其販賣さるべき商品價格總額の裡に表現されて居ると言ふべきである。⁵¹⁾ 人は茲に、スミスが貨幣の價值尺度機能⁵²⁾を説ける所以を看過してはならない。併し同一の貨幣片は轉々流通し幾回も媒介の用を果すが故に、現實に流通すべき貨幣量は流通速度だけ少量にて足りる。而して貨幣の流通は商品流通の反面であり其反映たる以上、⁵³⁾貨幣の流通速度は受動的であつて、一定の時にはそれは所與のものと見做し得るであらう。斯くて流通貨幣量は、年々販賣さるべき商品價格總額に正比例して増減し貨幣自體の價值に反比例して増減する。⁵⁴⁾

從てスミスの所説の裡には、貨幣價值の變動を専ら其數量に基かしむるが如き數量説的な見解は看取さるべくもない。人は寧ろ茲に、貨幣數量を非能動的要因となし、貨幣量の變動を以て貨幣自體の價值の變動に順應的なものなりと主張するブロックの所謂「*Mengenlehre*」を見るべきではなからうか!⁵⁵⁾

三

貨幣殊に金屬貨幣の價值に關するスミスの見解は、大體以上に盡きやう。然らば斯かる見地に

49) F. Hoffmann, Kritische Dogmengeschichte der Geldwerttheorien, 1907, p. 70.

50) 此點に就き Hollander 及び Greidanus の批判がある。Cf. J. H. Hollander, The Development of the Theory of Money from A. Smith to D. Ricardo. Quarterly Journal of Economics, vol. XXV, 1911, p. 436 et seq.; Greidanus ibid., p. 33 et seq.

51) Smith, ibid., vol. I, p. 276-7, 322-3, 406-7, et passim; vol. II, p. 50.

立ちて、彼は如何に紙幣の價值を説くか？ 貨幣は、それが交換の用具たる限り、其實體は何等問題にはならない。それが購買力の表示者でさへあれば、其實質價值の有無は最早全く問ふところではない。一定額の貨幣所得も、それが金貨で支拂はれやうと、或は又、紙幣で支拂はれやうとも關するところではない。蓋し、所得なるものゝ其取得者にとつて意味するところは、金貨そのものでも或は紙幣そのものでもなく、寧ろそれに依て購ひ得べき消費財そのものに外ならないからである。從てスミスは交換の用具たる貨幣の性態を三形に於て把握せる所以である。⁵⁶⁾

斯くて紙幣の本質は貨幣の交換用具としての規定の裡に存し、其流通可能の根據も貨幣の此機能の裡に與へられて居ると言ひ得る。然るにこのことを認識し得ざるスミスは、銀行券の流通が其本質に於て金屬貨幣流通の法則に支配されるの故を以て、交換の用具たる金屬貨幣の代替物である紙幣をも、遂に銀行券に於て捉へた。それ故彼にとつては、紙幣は交換の用具としての貨幣の一形態たるものではなくて、單に無用の經費を節約すべき意欲の成果として現はれる。このことは、彼の紙幣論が交換の用具たる貨幣の理論の裡に、從て鑄貨論と共に展開されることなく、⁵⁷⁾寧ろ交換經濟のより高度に發展せる經濟段階（ここでは信用貨幣殊に銀行券が支配的である）に於て現はるべき貨幣資本の敘述と共に關説されて居るといふことからしても、容易に推論され得る。即ち彼は「國富論」第二編第二章に於て、流通資本の一種なる貨幣が、社會の所得の上に及ぼすべき其影響の點で、機械や建物等の固定資本と非常に相類似する所以を説ける傍ら、紙幣流通の可能に言及

52) Smith, *ibid.*, p. 274-5, 305, et passim.

53) Smith, *ibid.*, p. 410.

54) Smith, *ibid.*, p. 188-9, 235.

55) H. Block, *Die marx'sche Geldtheorie*, 1926, p. 100.

56) Smith, *ibid.*, p. 274.

57) Smith, *ibid.*, bk. I, ch. 4.

して居るに過ぎない。

スミスは先づ、金銀は貨幣たることに依り、それが富の生産には寄與するのではなくて、富を各人に分配する高價な用具として機能するに過ぎないと説き、之に依て流通せしめらるべき消費財とは全く別であつて、貨幣商品の特異性を強調して居る。⁵⁸⁾ この交換の用具たる貨幣は、道具類と同様に、資本の貴重なる一部を形成するが、併し決して社會の所得の構成部分たるものではない。此貨幣の蒐集維持には一定の經費を要する。そして此經費は社會の總所得の一部ではあるが其純所得を成すものではない。故に此社會の純所得を減少せしむべき經費は出來得る限り之を避けねばならず、斯かる見地に立ちてスミスは、高價なる金屬貨幣に代るべき廉價にして併も同一の便利ある紙幣の流通を説いたのである。即ち彼は、經濟人の合理的活動の裡に紙幣流通の根據を求めて居る。そして更に、此紙幣流通の當該社會の所得増進の上に寄與すべき實狀に就きて詳論して居る。⁵⁹⁾ 吾々は茲に、貨幣生成論に於けるスミスの合理主義の片鱗を、再び看取することが出来る。⁶⁰⁾

紙幣を以て金屬貨幣の單なる代替物に過ぎずと見るスミスにとつては、從て、紙幣は孰れも其本質に於て一様であり、且つ其種類も單に外的な差異を意味するより外なきが如くである。このことは又、紙幣の價值に關する彼の見解の上に著しき影響を與へた。彼は斯かる紙幣として専ら銀行券のみを論じ、銀行券の流通が流通界の需要に依存するものであつて、其數量は流通界の必

58) Smith. *ibid.*, p. 272-3. et *passim*.

59) Smith, *ibid.*, p. 275 et *seq.*

60) 拙稿前掲論文、I頁以下參照。

要とする金屬貨幣の總額を超過し得ずとする。⁶¹⁾而して金屬貨幣の流通は、既述の如く、販賣さるべき商品價格總額に依て決定される。從て銀行券の流通量は、全く取引上の必要に準據し、過剰銀行券は直ちに銀行に復歸すべく、其兌換の確保されて居る限りは、此等銀行券の數量を増大せしめることは其發行者たる發券銀行のよくするところではない。此點に於てスミスは、後世のトワーク、フアーラートンに依て代表されし銀行主義の先驅者なりと言ひ得る。如斯く銀行券の流通が其本質上、金屬貨幣流通の法則に従ふを以て、銀行券の價值は全く其兌換さるべき金屬貨幣の價值に等しい。故にスミスは、銀行券の通用力を其發行銀行に對する一般民衆の信認の裡に求め、そして銀行券が要求拂のもので其支拂が隨時無條件に行はれる場合には、それは何時でも金屬貨幣に兌換し得るが故に、其價值と異なるところがないと論じて居る。⁶²⁾故に彼は、紙幣の増加は通貨總量を増大させ從て其價值の低落、物價の騰貴を惹起せしむ、との一般の主張に對し斷然反對を表明する。即ち流通界に注入さるべき紙幣量はそれだけ金屬貨幣を排除し、從て紙幣は當然通貨總量を増大せしむるものではない。それ故、一七五一、二年及びスコットランドに於ける紙幣の大幅增加直後に現はれた食料品の價格騰貴も紙幣の増加に基因するのではなく、寧ろ氣候の不順こそ其原因であつたと説く。⁶³⁾これ金屬貨幣に關し其數量に依る價值の決定をば『俗見』として拒否せる彼が今また銀行券に就ても同じ立場を固執せるものであつて、銀行券を金屬貨幣の代替物となし、それが本質上金屬貨幣流通の法則に従ふものとなす限り、蓋し當然の歸結である。然る

61) Smith, *ibid.*, p. 283, et passim.

62) Smith, *ibid.*, p. 276, 397.

63) Smith, *ibid.*, p. 307-8.

に此點を理解せざる論者は、却て彼の此所説を論難す。⁶⁴⁾

勿論スミスは、銀行券の本質に就て或る程度正當に理解して居た様である。彼は銀行券を以て私人の商業手形に代れる銀行手形に外ならずとなし、銀行券の發行が商業手形の割引に基けることを述べて居る。⁶⁵⁾而して此種銀行券の發行は流通界の需要に全的に對應するものにして、それは何等過剩發行に陷るが如きことは斷じてない。⁶⁶⁾然れ共、『流通爲替手形又は空手形』に對して發行されし銀行券に就ては事情異なる。それは何等流通界の需要に對應せず、恰も不換紙幣の發行と同様に、購買力の無き所に之を創造することを意味す。從て彼は、斯かる銀行券は『流通すべき金銀の價值』に超過せるものであり、それは必然直ちに銀行に回歸するであらうと説く。⁶⁷⁾故に此等兩種の銀行券は、夫々その性質を異にするものゝ如くである。

然るにスミスに在ては、支拂手段の貨幣規定が充分に認識されて居らず、銀行券がたゞ金屬貨幣の代替物として理解されてるに過ぎず。そこでは銀行券の金屬貨幣に對する標章としての側面のみが強く前景に押し出されて居る。從て商業手形の割引に基ける銀行券も、空手形の割引に依る銀行券も、彼にとつては何等本質上の區別を意味せず、且つ其他の紙幣に就ても單に外的な差異として現はれるに過ぎない。他面、紙幣を以て交換用具としての貨幣規定に於て理解せざる彼は、不換紙幣の價值決定の事情を専ら兌換性の缺除といふ點にのみ求めて、其價值下落の程度は紙幣の終局の決濟及び償還の期限の長短と其確實性の多少如何に準據するとなす。偶々その發

64) 高垣博士、前掲論文、175頁、及び山崎博士、前掲書、128頁參照。尙ほ金屬貨幣の價值の變動と紙幣の價值の變動との獨自性に就ては、スミスは之を明確に論じて居る。(Cf. Smith, *ibid.*, p. 311-2.)

65) Smith, *ibid.*, p. 281.

66) Smith, *ibid.*, p. 287 et seq.

67) Smith, *ibid.*, p. 294 et seq.

行數量の多少にも依存すべきを説くも、未だ充分なる展開を見ずして終つた。⁶⁸⁾

斯く不換紙幣の價值の決定要因を専ら表面的な事由の裡にのみ求めんとするスミスは、兌換性の缺除の故の低價值の紙幣も、租税支拂手段たることに依り、一種の増加價值を得ると説き、法定支拂手段としての規定を以て斯かる増加價值の根源となし、紙幣の價值に關する後世の *senkurstheorie* の先驅的思想を展開して居る。⁶⁹⁾ 而して茲でも増加價值の大小が、發行數量の多少に準すべきを説いて居る。⁷⁰⁾ 更に紙幣の發行數量の限定が、時には同一額面の金屬貨幣よりも其價值騰貴し得ることあるを、アムステルダム銀行貨幣に就いて述べ、紙幣の價值決定上、兌換性の有無よりも數量こそ決定的要因なることを暗示して居るものゝ如きも、併も該銀行貨幣の打歩を以て、金屬通貨の實貨價值と名目價值との不一致の故に生じたるものとなす。即ち該銀行貨幣は、常に其純分の確保されし金屬貨幣を代表し全くの金標章たるを以て、金屬通貨の實貨的内容と名目的内容との差額が打歩として現はれたと説き、⁷¹⁾ 斯かる銀行貨幣の供給量が其需要に及ばざることの裡に打歩の發生を説く見解に反對せるが如くである。⁷²⁾

スミスの言へるが如く、銀行券流通の限界は金屬貨幣の流通數量であり、兌換が自由なる限りは、銀行券の流通量は常に金屬貨幣の流通量に依て規定され、銀行券は正しく金屬貨幣の標章に外ならない。そして流通界の需要に超過せる銀行券は、直ちに銀行に戻つて氾濫することはあり得ない。然るにいま、兌換が停止されるならば、銀行券の流通量の増減は最早金屬貨幣のそれに

68) Smith, *ibid.*, p. 310-1.

69) Cf. K. Helfferich, *Das Geld*, 1921, 5. Aufl., p. 254, 539 et seq.

70) Smith, *ibid.*, p. 310-1.

71) Smith, *ibid.*, p. 443 et seq.

72) Smith, *ibid.*, p. 311.

は對應せず。兩者の聯關は全く斷ち切られて終ふ。そして銀行券の増減は全然貨幣當局の恣意に委ねられ、それは最早金屬貨幣の標章には非ず。其表示する價值は、同一價額の金屬貨幣のそれではなくて、紙幣の流通なき場合に流通すべき金屬貨幣量そのものに過ぎず。從て銀行券の價值は其數量の變動に反比例して騰落するに至る。茲に於て銀行券の價值は其數量を決定するのではなく、却て逆に、其數量が價值を決定するのである。即ち銀行券の價值は、最早、金屬貨幣流通の法則に服せずして、紙幣流通の法則たる數量說に依て規定される。然るにスミスは此歸結に至る一步前で停止し、數量なる要因を充分に評價することなくしてやんだ。而してこの正當なる結論への一步手前で停止せざるを得なかつた所以のものは、實に、紙幣流通そのものを貨幣の交換用具としての規定に求めずして、單に紙幣を以て金屬貨幣の代替物に過ぎずとなし、銀行券とその他の紙幣との本質的な相違も遂に見うしなはれるに至つたに依るものと言はねばならない。斯くて不換紙幣の價值決定の問題は、遂にスミスに於ては、未解決のまゝに終つた。そしてこれが解決こそは、リカアドに残されしところであつて、紙幣流通の法則としての貨幣數量說は、リカアドに於て初めて充分なる展開を見るに至つたのである。

(一九三四・六・二二)